

紹介

西岡虎之助

莊園史資料

本書は、前早稲田大学教授西岡虎之助氏の古稀を記念して、洞宮雄・松島栄一・鹿野政直氏を中心に、奥野中彦・浅沼正明・杉仁・中村恵次・成沢榮寿・佐藤和彦・長岡篤・奥宮敬之・三木靖・川合光也・稲生晃・滝森英夫・安在邦夫・野口信治・永山喜教・鳥養直樹の諸氏が編纂された資料集である。莊園史資料とはいえ、「律令体制下における莊園の成立」(天年勝宝七年三月九日付越前國桑原莊券に始まり、「莊園制の形成」)「莊園制の確立」(「莊園制の変質」)「莊園制の崩壊と知行制の成立」と大項目を立て、最後は幕藩体制成立と農村の小見出しのもと、延宝六年二月の撰津國天王村惣百姓口上書写に及んでいる。この間、狭義の莊園史にとどまらず、莊園の制度的側面、武士・農民・農村・地頭・守護・戦國大名・農業技術・手工業商品流通など、い

わゆる社会経済史のあらゆる問題を、項目を立てて列挙し、農民の娯楽や芸能にも及んでいる。しかもその史料は、地域的には全国に求め、「教王護国寺文書」や「柏原区有文書」など新紹介の史料も博搜されている。そうした「日本中世社会の全体像を構成」するための史料集の作成、に編者の意図と苦心があるわけであり、中世社会経済史のあらゆる問題について、規準になるべき史料が撰択せられているわけである。

戦後二四年、かつて西岡氏が開拓され、ある意味で大成された莊園史―中世社会史は、質・量ともにめざましい発展をとげた研究分野である。それだけに、いろんな概念について、研究者の間に微妙な差異もあり、共通の史料による、共通の概念の設定が研究の一層の発展にとって急務となってきたいと考えられる。本資料集は、その為、きわめて有効であるといえよう。古稀記念の出版としてまことにユニークであるとともに、西岡氏の記念としてまことにふさわしい出版である。

ところで、あらゆる問題を、全国的規模でハンデイングに整理することは、文字通り至難の業でもある。本書を一読して、そ

の整理の見事に驚歎するのであるが、同時に網羅主義であることが、一つの欠陥でもあるように思われる。莊園史という場合、東大寺・東寺・興福寺・高野山・公家領等の大莊園領主の莊園のもつ意味が大きく、いろんな概念も、それらの莊園に根拠をもつ場合が多い。それは、研究史の実情であるとともに、中世社会の特質でもあると、私は考えているのであるが、そうした立場からみれば、本史料集は、いささか中心がまともらぬきらいがある。とくに、莊園制の中心である大和の興福寺や東大寺関係が、ほとんど脱落していることは、私にとって、は、いささか不満である。

とはいえ、本書収載の史料が、何れも嚴重な吟味を経た適切なものばかりであることはいままでもない。重ねていえば共通の史料による共通の討議の場を提供された仕事として本書は大きな意味をもっている。

(A5判五四二頁 昭和四四年四月 校倉書房刊 定価四、〇〇円) (熱田 公)